怒りの炎を燃えあがらせ

退職勧告状を灰にしてたたき返えし

あとがき

勧告状返上総決起大会は十二月八日午前十時からはじまって、このルポのように、私たちの「怒りの焔」につつんだものすごいものでした。

そして山ノ上クラブ前で各支部毎に約二時間余にわたって、つぎつぎに「勧告状」を燃やしつくし灰にして会社にたたき返えしました。

それは異常な盛り上りをみせた感動的なものでした。

しかし、その行動はみごとな統制の下に堂々とおこなわれ勧告状を燃やした火のあとは、当然のことであるが、行動隊員がきちんと始末をしました。そして燃え残りの木は三輪車で持ち帰りました。

この日の統制ある整然とした行動を、つめかけていた多くの報道陣や市民たちはある種の驚きの目でみていました。

この 看護婦を見にこられた女性 が、どうして「業務阻害」をするものか。断じて業務阻害者などではない。

ちがいの代なら網、子をついできびしい労働に耐え、あるときは人畜無害の労務管理のムチに血をさえ流して働き、たくさんの仲間が、おそろしい業績に、ムツとロから血をふいて、その朝まだ星が凍っている寒空の下で、コークスをおこし、〝ミソ汗〟をこさえ、一番方におくってくれた妻を思う瞬時さえもあたえられず死んでいった。ある者は過労する炭車に身体を両断されて消えていった足をもぎとられ、腕をちぎられ、指をきって石炭を掘って来たのだ

おれたちは、汗をふき、血を流して石炭を掘った。

私たちは奮起にたえ夫をささえ子供たちをそだてきた。石炭、お前は幾世紀も地圧にたえ地脈に

ルポを書いた人

宮浦＝田部州司郎
三川＝小山あきら
本所＝水盛道乃
港務＝松岡文雄
みいけ編集部

に を誓えたのだろう。父祖が掘った、その切羽をあるいて、炭層のつづきを掘るだけで、五十年前と、どれほども変らぬ、生きているだけの生活。いな、**生きつづけてゆくことも出来なかった仲間が、何百人、何千人、この坑底を血に染めて、生命を絶ったことだろう。**

三池はおれたちのもの、おれたちの父祖が、血と汗をながして守りつづけ、おれたちがまたその子にゆずるべきもの。その三池の維持者であるおれたちを、勝手な理窟と勝手な規準を設けて、首を切り、この土地から追いだそうというのか。

きょう、退職勧告返上の日。

おれたちが扶養して、所長や社長の椅子をあづけてやった、きさまらが、このおれたちの首を切るというのか。増長慢もほどがある。

三鉱労組三万の、組合員とその家族が、**三万の心がひとつの怒りに固まり、憤怒の焔となって、初冬の曇天を焦すを見よ。**

同じ怒りを胸奥にたたみこんだ、三万人のデモの、その足音は、どこまでも、どこまでも、きさまらを追い、きさまらの身体を乗りこえて、押しすすんでゆく。

燃えろ!!みいけの火よ、みいけにはじまって、この国の隅々まで。この火で潔められたあとにこそ、おれたちの、饒望してやまぬ、平和の楽土は築かるべきであろう。

（説）

会社に首切りの資格はない
無能経営者の退陣要求

山ノ上クラブ前。

石炭の街、労働者の街大牟田のそこだけが不自然に高まって、カミナリに燃え裂けた大きな木もある巨。空襲で焼けたが戦前はそこに大きな三井の山ノ上御殿が、おれたちの父や兄らを汗水流すようにこき使い、三井独占を謳歌したその象徴があったところ。

そして戦後、焼けた昔の御殿の礎石がまだ残っている丘の一角に再建された赤いジュウタンを敷いた豪華な、何かうしろめたい暗い影をもつ、ものおじするような豪華さのクラブのあるところ。

六年前、一二三日の闘いの最中夜びえのきびしい十一月だった。三日三晩おれたちの、私たちの怒りでこのクラブをつつんだところである。

そして、数千の警官と夜半から朝方までにらみあった長い緊張の時間を、鮮明な記憶としてよみがえらせてくれるところだ。

あの夜のかがり火の色と、朝空の星の位置が思い出せるところだ

門は閉ざされている。有刺鉄線が張りめぐらしてあり、重い錠がさげてある。

その奥の玄関の格子戸は内側から全面を板付けにしている。外に面したガラス戸はすべて紙でおおってあり、ところどころに小さな四角い紙をきったのぞき窓がこしらえてある。屋根の上には青いマイクのラッパが二つとりつけてある。

代表団は門をたたくが、ナシのつぶて。

組合員がニュースカーのマイクをつかって中にいる幹部にいった

「私は、三池炭鉱労働組合の組合長宮川です。若林所長に団交を申入れます。それについての会社側の回答をもとめます。すみやかに回答してください」

返事はない。連絡員さえもそうとしない。

書記長がマイクをとって、ふたたび会社幹部にいった。

「私は書記長の成原です。交渉窓口の原口課長代理に申入れます。指名退職勧告についての団体交渉を申入れます。労働協約に従った口頭陳式の申入れとして正式に受けてください。

先月末の交渉で、あなた方は、労働協約は守ると言明したし、労働協約では、スト中といえども団交申入れについては誠意をもって応じなければならない、とあるのです。正式なものとして返事をしてください」と。

主婦会長の岡場さん、副会長の藤さんもマイクをとって会社の不当なやり方をなじり抗議をした。

「私は主婦会の代表です。そして今日勧告状を返上に集った三万の代表です……。先ほどからの重ねての申入れは、あなたたちの耳に入っているはずです。返事ぐらい

したらどうです。あなたのいる屋根の上のスピーカーを使ったらどうです……」

一向に反応はない。

行動隊が、急ごしらえの足台にのぼってクラブ中の様子をうかがっている。

「連絡員ぐらい出したらどうだ」

と叫ぶ。もちろん通じない。玄関横の炊事場の大きな調理台の上に、たくさんの牛肉がのせてある上等の肉だ。彼等は一週間分の食糧を確保してあるという。

「あつ！」

人の気配がする。

「そののぞき窓から、のぞいているのは誰だ」

のぞき窓から目が光っている。目だ。イヌ共の目。クビ切り幹部の指示で、外の動向をうかがっているヒクツな色に光った目。

そこだけでもない。こっちののぞき窓から、カメラの目がのぞいている。ものおじながらも、あきらかに何かをねらっているカメラの目だ。八ミリ撮影機のまわる音もきこえる。

何かがしかけてある。私たちは本能的に悟った。

みなれない、ハンチングに黒メガネの男がいる。

山ノ上に向って進撃
火の色に闘魂を燃やせ

その間、約一時間あまり。本社中庭の三万は

三鉱連河野事務局長、田中代議士、三池はりつけの総評井諏団らから、はげましの挨拶をうけ、労働歌をうたって待機していた。

待ちどおしかった。

……

どよめきと拍手、喚声がわいて代表団が帰った。

書記長の報告

「みなさん。かれらはカタツムリ

と叫ぶ。もちろん通じない。玄関横の炊事場の大きな調理台の上に、たくさんの牛肉がのせてある上等の肉だ。彼等は一週間分の食糧を確保してあるという。

「あつ！」

人の気配がする。

「そののぞき窓から、のぞいている

「君は、誰だ。会社の者か」

その男は、だまったまま威張ったような顔を突出した。視線がふらつきかつた。目と目の対決。威張った強がりの目。その視線がそれて、ヒクツな笑いでうつむいた。

権威に弱いにごった目が、たじろぎながらうつむく……とそれはあきらかに私服の目だ。

「君はポリだな、私服だろう」

犬は、シッポを巻いて奥にかくれた。

刻がたつた。刻がたつた。

野天で緊急戦術委員会をひらいて対策を検討そのまわりを行動隊がビケでとりまく。

隅が動いて、刻がすぎる。

策がねられて、戦術委員会がすんだ。

組合長から撮後通告。十二時二分前。

あきらかな挑発だ

「若林所長に申し上げます。団交の申入れを行っています。すみやかに会社の態度をあきらかにして下さい。五分間待ちます。それまでに回答を下さい……」

すぐそばにあるMデパートのミュージックサイレンが昼をつげると、その反対側の工場地帯からそれをおっかけるように、すこしづつずれていくつものサイレンがなって、しばらくたって五分がすぎた。

――返事はない――

組合長

「……会社はそのような態度で、クビ切りをやろうとするのか……会社にクビ切りの資格は絶対にないことを断言する……。団交にも応じないあなたたちは経営権の放棄をしていることになる。そう理解してもいいか……。一応ここは引き上げ、みんなでくるぞ」

組の研修会が大牟田で開かれたとき、私は三池労組にかけられた敵の攻撃についての報告を約二十分いたしました。

ところが、報告を終ると同時に緊急動議が出され三池労組にたいする「即時カンパ」と代表団派遣が満場一致で決定されました。

すぐ本部に帰った私はこの感激のままをみんなに話していたところ二十名近い先生方が来られ、ずつしり重い紙封筒を差出されました。二万三千円近い「カンパ」とあたたかい激励のことばをいただきましたが、私たちのたたかいはもはや三池だけの闘争ではない、とつくづく考えさせられました。

したいと思います」

と力強い提案が終ると、一瞬ほんの一瞬の間があつた。それは、次への躍動と行動のための緊張。本能がつくりだした瞬間の間。その一瞬のあと

「ガンバレ、ガンバレ」ききとりにくいが、そんなどよめきがおこつて、さつと代表団のとおる道があけられた。敵味方行動だ。そこを戦術委員、主婦会三役、上部組織代表らで編成された代表団がスクラムをくんでつきすすんでいく

正門前で、二台のニュースカーに分乗して、山ノ上クラブに飛ばした。

報道陣の車があとを追う。

団結は怒れるものを知らない。

しかし、その開した門の内にはあきらかに敵の挑発がまつている挑発にのるな！

勧告状を怒りの焔で燃やすのだ

彼等の門前で堂々と焼きつくし灰にしてたたき返えそう。

火の色に闘魂をもやせ。

デモ隊は、クラブの門前をグルグルとまわつた。

怒りが高まつていく。

憎しみがたぎつてくる。

火がついた。

燃えあがつた。

焔がめらめらとあがる。

栗木幹がもえている。

ふたつめのプラカードが火の中に投げこまれて

若林所長に火がついた。

そのまわりをグルグルとデモ隊はまわる。

ワッショイ　ピッピイ

こみあがつてくる感動

涙と汗と、涙が流れる。

勧告状をつめこんだ千両箱のみこしをかついだ行動隊の青年が、のけぞるようにまわる。

まわりながら、たくましい、きたえられた労働者になつていく闘いの中で、若者のたましいはきたえられる。

嵐の中で若者の心は美しくなつていく。

怒りで燃やす焔の色が

労働者をきたえる。

つぎつぎにプラカードが投げこまれ、焔がそれをつつんで千両箱を闘魂が灰にした。

怒りの焔が勧告状を燃やしつくした。

熱気をおびた灰が残つて、勧告状がなくなつた。

その灰を見たとき

資本家の敗北を見て

私たちは勝利の確信をつかんだ

おれたちは勝利を確信した。

……

（写真上）山ノ上広場で燃え上つた労働者の闘魂と誇い。

わきあがつてくる感動とふき出る汗をそのままに、のけぞりながらまわる。